

西暦・和暦年号対比表 2 (南北朝時代)

西暦	干支	南朝				北朝				備考
		改元	元号	年	天皇	改元	元号	年	天皇	
1331	辛未	5/5	元弘	1	後醍醐		元徳	3	光厳	
1332	壬申		元弘	2		9/20	正慶	1		
1333	癸酉		元弘	3			正慶	2		鎌倉幕府滅亡
1334	甲戌	1/29	建武	1			-			建武の新政
1335	乙亥		建武	2			-			
1336	丙子	2/29	延元	1			建武	3	光明	南北朝分裂
1337	丁丑		延元	2			建武	4		
1338	戊寅		延元	3		8/28	暦応	1		足利尊氏室町幕府
1339	己卯		延元	4	後村上		暦応	2		
1340	庚辰	4/28	興国	1			暦応	3		
1341	辛巳		興国	2			暦応	4		
1342	壬午		興国	3		4/27	康永	1		
1343	癸未		興国	4			康永	2		
1344	甲申		興国	5			康永	3		
1345	乙酉		興国	6		10/21	貞和	1		
1346	丙戌	12/8	正平	1			貞和	2		
1347	丁亥		正平	2			貞和	3		
1348	戊子		正平	3			貞和	4		
1349	己丑		正平	4			貞和	5		
1350	庚寅		正平	5		2/27	観応	1		
1351	辛卯		正平	6			観応	2		観応の擾乱 (~ 52)
1352	壬辰		正平	7		9/27	文和	1	後光厳	
1353	癸巳		正平	8			文和	2		
1354	甲午		正平	9			文和	3		
1355	乙未		正平	10			文和	4		
1356	丙申		正平	11		3/28	延文	1		
1357	丁酉		正平	12			延文	2		
1358	戊戌		正平	13			延文	3		
1359	己亥		正平	14			延文	4		
1360	庚子		正平	15			延文	5		
1361	辛丑		正平	16		3/29	康安	1		
1362	壬寅		正平	17		9/23	貞治	1		
1363	癸卯		正平	18			貞治	2		
1364	甲辰		正平	19			貞治	3		
1365	乙巳		正平	20			貞治	4		
1366	丙午		正平	21			貞治	5		
1367	丁未		正平	22			貞治	6		
1368	戊申		正平	23	長慶	2/28	応安	1		明建国
1369	己酉		正平	24			応安	2		
1370	庚戌	7/24	建徳	1			応安	3		
1371	辛亥		建徳	2			応安	4	後円融	
1372	壬子	4/1?	文中	1			応安	5		
1373	癸丑		文中	2			応安	6		
1374	甲寅		文中	3			応安	7		
1375	乙卯	5/27	天授	1		2/27	永和	1		
1376	丙辰		天授	2			永和	2		
1377	丁巳		天授	3			永和	3		
1378	戊午		天授	4			永和	4		
1379	己未		天授	5		3/22	康暦	1		
1380	庚申		天授	6			康暦	2		
1381	辛酉	2/10	弘和	1		2/24	永徳	1		

西暦・和暦年号対比表 2 (南北朝時代)

西暦	干支	南朝				北朝				備考
1382	壬戌		弘和	2			永徳	2	後小松	
1383	癸亥		弘和	3	後龜山		永徳	3		
1384	甲子	4/28	元中	1		2/27	至徳	1		
1385	乙丑		元中	2			至徳	2		
1386	丙寅		元中	3			至徳	3		
1387	丁卯		元中	4		8/23	嘉慶	1		
1388	戊辰		元中	5			嘉慶	2		
1389	己巳		元中	6		2/9	康応	1		
1390	庚午		元中	7		3/26	明德	1		
1391	辛未		元中	8			明德	2		

南北朝 始まり 記	<p>元徳3年5月5日、後醍醐天皇を中心とした倒幕計画が発覚し、それに関わった者たちに対する鎌倉幕府による厳しい追及が行われていた。その最中の8月9日、後醍醐天皇は「元徳」から「元弘」へと改元して鎌倉幕府にも詔書を下したが、幕府はこれを認めず「元徳」を使い続ける(『関城書』裏書)とともに、9月20日には光厳天皇を新たな天皇として即位させた。</p> <p>元弘2年/元徳4年(1332年)には後醍醐天皇は隠岐への遠流に処され、その間に光厳天皇は正慶に改元した。元弘3年/正慶2年(1333年)、後醍醐天皇は隠岐を脱出し幕府を滅ぼした。「正慶」の元号は鎌倉幕府滅亡とともに使われなくなった。</p> <p>元弘4年1月29日、建武に改元した。</p>
	<p>元弘3年/正慶2年(1333年)、鎌倉幕府を打倒した後醍醐天皇は流刑先の隠岐から京都に復帰して、鎌倉幕府によって擁立された持明院統の光厳天皇の即位とその元号である「正慶」の無効を宣言した(光厳天皇はこれを拒んだが、後醍醐天皇側の軍事力を前にすすべがなかった)。後醍醐天皇は親政を開始して、元弘4年1月29日、武の字が不吉だという周囲の反対を押し切り、勅旨を出し建武に改元した。光武帝が篡奪者王莽を倒し、漢王朝を復興した(後漢)際の元号(建武)にちなんだものである。</p> <p>その後、武家勢力の離反にあい建武の新政は二年余りで崩壊した。後醍醐天皇は建武3年2月29日に延元に改元した。のちに光明天皇を擁立した北朝方は、建武の元号を使い続け、建武5年8月28日に暦応に改元した。</p>
終 わり 期	<p>康応2年3月26日 天変・兵革により 明德 に改元 元中9年/明德3年閏10月5日 後龜山天皇譲位により元中の元号を廃する 明德5年7月5日 応永に改元</p>